九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『九命奇冤』と『梁天来』

麦生，登美江

https://doi.org/10.15017/9799

出版情報：中国文学論集. 5, pp.47-61, 1976-03-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『九命奇寃』と『梁天来』

麦生登美江

一

呉趼人は一九六六年、広東省南海県の没落地主官僚の家庭に生まれ、一九一〇年に上海で没した。二十余才の時、家計を助けるため上海へ出て江南制造局に勤めたが、その頃から小品文を新聞に投稿するようになった。しかし、作家として一躍有名になったのは梁啓超主編の『新小説』に『二十年目睹之怪現状』（以下『二十年』と略記）を発表してからである。思想的には立憲君主制を志向する変法派を支持していた呉趼人は、梁啓起の「論小説与群治之関係」に賛同し、その立場から多数の小説を書き、『二十年』に続いて『電術奇談』『九命奇寃』『痛史』を『新小説』に連載して文名はますます上がった。『新小説』停刊後は『月月小説』を主編して『上海游驂録』『立憲万歳』『人鏡学社鬼哭伝』などを執筆しているが、その三十数種にのぼると言われる小説の中でも呉趼人の代表作と目されているのは前記『二十年』であり、『九命奇寃』（以下『九命』と略記）は従来『二十年』ほどには注目されていない。魯迅も『中国小説史略』において『二十年』についてはその本文を引用してまで解説を加えているが、『九命』の方はただその書名をあげるにとどまっている。新中国になってから著わされた文学史のほとんども、『九命』については『二十年』ほど多くの紙数を割いていないし、たとえ『九命』の評価を試みたとしてもその中に表現された呉趼人の改良主義的思想を批判するだけに終って、作品そのものの創作方法にまで言及してはいない。それらの中にあって復旦大学の『中国近代文学史稿』において、

『九命奇寃』のプロットは、呉趼人のあらゆる作品の中でもっとも完全でゆるみがない。物語はあくまでも両家（凌家と梁家—筆者註）の裁判をめぐって展開され、読者はそのストーリーの中に引き込まれてしまう。表現技巧の上では倒叙法を用いており、冒頭が全書のクライマックスであって、読者を最初から緊張した雰囲気のなかにまきこむ。こうした創作方法は明らかに外国小説の影響を受けている。[1]

とあるのが目にとまる程度である。劉大傑[2]や呉小如[3]も右の見解とほぼ同様の批評をしている。ところがこのような新中国にな

ってから著わされた文学史よりはるか以前に、もっとも簡潔で適確な批評を下しているのは胡適である。彼はその著『五十年来中国之文学』において、次のように言っている。

九命奇寃は中国近代における完全無欠の小説である。呉趼人は百余年前の広東の一大殺人事件をプロットとして終始一貫この事件を描いており、ひじょうに精彩に富んでいる。この小説では迷信や官吏の汚職、人の心の陰険さを描いているが、それらはすべて全体の有機的部分を構成しており、迷信や汚職などをむりやり挿入して、それにかこつけて誰かを罵ろうとしたものではない。諷刺小説の短所は暴露しすぎること、浅薄すぎることにあり、他人を罵倒する材料ばかりを取り上げることに急で構成に意を用いることがなく、読者にいや気を感じさせる。ところが九命奇寃はこの諷刺小説の悪習を完全に脱している。この作品は諷刺の意図をおさえてそれを付属材料としている。しかしそれらの付属的な諷刺材料は、九命奇寃全体のストーリーの中で読者にとりわけ真実味を感じさせ、大きな感動を与える。(4)

このように胡適に絶讃された『九命』であるが、これは呉趼人のオリジナルな作品ではなく基づいたものがあった。『九命』に描かれている事件は清朝四大奇寃の一つと言われているもので、雍正年間初頭に広東で発生した。そのため広東においては民間にも広く知られた大事件であり、この素材は小説や戯曲などにしばしば取り上げられてきた。そして呉趼人自身も重編『九命奇寃』(5)と称して底本のあったことを暗示しているため、『九命』発表後その底本探しが盛んに行なわれた。その結果、孫楷第(6)・阿英(7)・劉大傑(8)らは広東の人、安和が嘉慶一四年に著わした『警富新書』(または『警富奇書』・『梁天来警富新書』とも称す)が『九命』の底本であると言っている。

しかし、香坂順一氏は「《九命奇寃》の成立」(『日本中国学会報』第一五集所収)において、『九命』が直接に底本としたものは『警富新書』そのものではなく、この本をもとにして書き換えられ、広く広東地方に流布していた民間の俗書の一つ、あるいは二つが選ばれたと指摘している。

香坂氏によると、呉趼人が『九命』に筆を染める前、広東地方には二種類の『警富新書』が存在していた。一つは安和本、もう一つは無名の民間文学的な色彩が濃厚なものである。香坂氏は、『九命』はその民間文学の中でもとくに話本『八命伸寃』(羊城書局発行、光緒二〇年)に直接よっていると論じている。しかし、安和本よりもっと古いものがすでに雍正年代に刊行されていたらしい。無名氏の『梁天来』がそれである。これはおもて表紙の裏に印刷された〈出版説明〉に、

本書は清朝雍正年代に刊行された四〇回本古版によって重印した。(9)

とはっきり記されている。事件は雍正三年に発生し、八年に終結するのだが、雍正年間は一三年まで続くので、『梁天来』という小説が雍正年間のうちに刊行されたとしても時間的には無理がない訳である。まして広東の地に一大センセーションを捲き起こした異常な事件であってみれば、それが同じ〝雍正〟という時代にまず最初に作品化されたと考える方がむしろ自然で

あろう。事件が落着した雍正八年から数えてみても、安和が『警富新書』を刊行したと思われる嘉慶一四年までは八〇年の歳月が流れている。一世紀近くもたって突然この事件が小説化されたと考えるよりは、〈出版説明〉に明記されているように雍正年間に『梁天来』がまず書かれてそれが安和にまで伝わり、それを安和が書き直して刊行し、その安和本が一般に広まり、そのために阿英らも『九命』の底本は『警富新書』だと考えるに至ったとみる方が妥当ではなかろうか。

『梁天来』は『九命』に比べると内容も文体も荒削りで整っておらず、まさしく『九命』よりだいぶ以前に執筆されたものと推定できるが、今まで中国でも日本でもこの『梁天来』の存在はほとんど知られていなかったとみえて、阿英をはじめ私見の及ぶ限りでは誰もこの『梁天来』に言及していない。香坂氏は前記論文において〈警富新書―八命伸寃―九命奇寃〉の線を想定している。私はその『警富新書』に先行するものが『梁天来』ではないかと考えているが、それを実証するには現在のところまだ資料不足なので、底本の問題についてはまた稿を改めて論じたい。そこで本稿では、清末小説史の上で特異な位置を占めている割には従来注目されることの少なかった『九命』を『梁天来』と比較し、その異同の中から『九命』の特質を探り出すことを目的とする。

二

本論に入る前に、まず『梁天来』の荒筋を述べておこう。

清の雍正時代、広東省番禺県に商人で善良な梁天来と、富豪で監生の凌貴興の二人が住んでいた。梁家と凌家は親戚で、ひじょうに親しかった。郷試の際、貴興は一万両の賄賂を隣家の陳大人（陳氏は翰林と称しているが実はそうではなく、無頼の徒である）を通じて試験官に贈ったにもかかわらず不合格になった。占師、馬半仙の見立てによると、それは梁家の石室が貴興の運をじゃましているからだと言う。

貴興の叔父、凌宗孔は天来を訪ねて貴興に石室を譲るよう交渉するが、天来は「石室をこわしてはならない」との父の遺命を守ってどうしてもその石室を手放そうとせず、天来の弟の君来も「風水のような迷信を信じるな」と宗孔に言う。そのため貴興は梁天来に対する恨みを一途にエスカレートさせていき、梁家にさまざまな嫌がらせをする。

貴興の妹、桂仙はそうした兄の行為に心を痛め、死をもって兄を諫めようとする。貴興の妻も桂仙のあとを追って自尽するが、貴興は少しも反省せず、逆に妻と妹の命を償わせるため天来兄弟の命をねらう。凌家で梁家襲撃の計画を盗み聞きした乞食の張鳳は、それをすぐ梁家へ通報して天来と君来を避難させるが、その直後、貴興らは梁家の石室を焼討ちして天来の家族八名を殺してしまう。

天来は知県・知府・按察使などに次々に訴状を提出するが、いずれも貴興から巨額の賄賂を受け取った役人の不正な裁きによって天来の敗訴に終る。さらに天来側の唯一の証人、張鳳はわざと拷問によって殺され、合わせて九人の命が奪われた。ついに天来は上京して直訴することを決意するが、道中、貴興の手の者に命をねらわれる。その度に危険を乗り越えて上京し、

雍正帝が直ちに清廉潔白な官吏を番禺県へ派遣してやっと公正な審理が行なわれ、天来は冤罪を晴らすことができた。

荒筋としてはこのように事件の発端から六回に及ぶ告訴・審理・結審という単純なものである。しかもこの事件は、前述のように雍正年間から光緒年間に至るまで種々に作品化されてきた。それなのに何故、清代も終りに近い一九〇〇年初頭にこと改めて呉趼人が翻案し、『新小説』という変法派の雑誌に発表しなければならなかったのか？　次章でその創作意図を検討してみたい。

三

まず『梁天来』の執筆意図は、冒頭にある次のことばから推察できよう。

昔、金持の学者がいた。功名を焦るあまり自らの分に安んぜず、後に殺人事件を引き起こし、天子の怒りに触れてしまった。

この文からは『梁天来』の主人公はむしろ凌貴興のように感じられる。貴興は郷里で絶大なる金力と権力とを誇っていたのだから、進士や大臣をむやみに夢想せず、分を守って暮していさえすればぜいたくな生活と読書人としての栄誉を維持できた筈である。それなのに科名に憧れ、風水を信じたばかりに一転して殺人の大罪を犯して家財は没収されたあげく、処刑される破目になってしまった。『梁天来』の作者は、そういう貴興の生きざまに創作意欲をかき立てられて筆をとったと思われる。

一方、『九命』では第一回に次のように述べられている。要約を記してみよう。

強盗をやるのはふつう無頼漢か亡命者であって、富豪や紳士が強盗をやる道理はない。しかしこの事件は金持で、しかも読書人が強盗をやっている。これは不思議なことではあるまいか。さらにこの事件は、史上最高の治績をあげたと伝えられる雍正年間におこっている。これもまた不思議なことではあるまいか。

『九命』はこのように問題提起をしたあとで、第二回から事件そのものの説明に入っていくのであるが、最終回で貴興はじめ関係者それぞれの刑が確定した後、次のように書き加えて結びのことばとしている。

貴興が大金持であったにもかかわらず処刑される破目になったのは、すべて〈迷信〉のまいた禍根である。また、賄賂をもらった役人たちが処分されたのはすべて〈貪〉の結果である。

この第一回及び結末のことばから呉趼人の『九命』執筆意図はうかがえる。即ち、呉趼人が何より強く主張したかったのは、〈迷信〉を信じるべきではないこと、〈貪欲〉であってはならないことの二点であろう。呉趼人は清末においては珍らしいほどの合理主義者である。彼が扶乩（一種の心霊作用によって神降しを行なって吉凶を占うこと―筆者註）について論じた会話を次にあげよう。

扶乩などはまったく荒唐無稽なことです。それがどうして神仙や妖怪である筈がありましょうか。私は従来こんなことは信じていません。さらにもっとも笑止なことがありま

す。「信じればあるし、信じなければない」などと言うのです。こう言うならあれら鬼神の有無は人間自身が決定することになります。たとえばあなたは信じ、私は信じない。私たち二人が一緒にこの部屋にいたら、この部屋には鬼神がいるのでしょうか、それともいないのでしょうか。[18]

私はこの最後の喩えの部分に興味を引かれるのであるが、呉研人の反迷信の意識はこういう合理精神から育って来たのではないだろうか。呉研人は迷信打破を目的として『瞎騙奇聞』という作品を書いているが、『九命』はその作品につながる意図を持っているとみなしてよいだろう。

また〈貪〉について「利欲は人の明知を盲目にする」[19]と言っており、『梁天来』の「分に安んじる」という諦観にも似た消極的な生き方と異なり、これはもっと批判精神にあふれた積極的な姿勢を示しているように感じられる。貧困の中に生き、貧困の中に死んだ呉研人は、襲いくる窮乏と戦いつつ、つねに批判の目を持とうと努力を続けたのではなかったか。呉研人の作品を読んでいると「談論風発、滔々として倦まず」[20]という彼の面影が彷彿としてくるのである。

最後に「聖明の御世と賞讃された雍正年間にこんな暗黒の事件がおこっている」と呉研人が指摘したことについて、阿英は「歌舞昇平の世にみえて実際は危機が四伏している。『九命奇冤』が表現しようとしたのはこんな時代である。呉研人はいわゆる聖明時代の虚偽を暴露し、官吏の汚職を攻撃しようとしたのだ」[21]と評している。

しかし私はその阿英とは少し異なった見解を持っている。私は呉研人がほんとうに訴えたかったのは、雍正のような〝聖明の御世〟でさえなおかつこんな暗黒面を含んでいる。まして光緒年間のような、改革をめざした光緒帝は戊戌の政変と同時に幽閉され、変法派のリーダー、康有為や梁啓超は海外に亡命し、軍事費すら西太后の別邸である頤和園の建設費に流用されるようなでたらめな政治のもとにおいては、雍正時代にもまして官界の腐敗堕落は進行し、亡国の危機が深まっていくのも無理はない、ということではなかったかと考えている。たんに「聖明時代の虚偽を暴露する」というだけでは、時代状況に対する発言として説得力に欠けるのではあるまいか。

呉研人にとってこの『九命』を執筆していた頃の最大の関心事は、列強の中国分割・植民地支配から祖国を救い、独立富強の中国をつくりあげることであった。その主張を広く訴えるためにこそ彼は、元の襲来によって南宋がまさに滅びんとする時期にスポットをあてて『痛史』を書き、元に節を屈せず、その結果死地に赴いた文天祥を称揚するのである。また『雲南野乗』は、古人の開拓の辛苦を教えて清政府の顕官たちによる領土の安易な割譲を戒めることを意図して執筆された。さらに『発財秘訣』では、自己の利益のためには祖国を売ることさえ辞さない漢奸たちを痛烈に非難している。

呉研人は好んで『痛史』『雲南野乗』『両晋演義』などの歴史小説を書いたが、それはたんに正史を通俗的に書き直しただけのものではない。帝国主義列強の侵略と、清政府内部の目にあまる腐敗という内憂外患の危機の関頭にあって、やむにやまれぬ思いを小説に託したものなのである。なればこそ『人鏡学

社鬼哭伝』（反華工禁約運動が勃発した時、人鏡学社社員、馮夏威が死を以って抗議し、そのために運動はいっそう盛り上がりをみせた。ところがその後、一転して、以前起こした抗議行動の当の相手、アメリカの大臣の訪中を歓迎しているのを見て、夏威が哭泣している、というストーリー）に〝南海呉趼人、涙を揮って撰す〟とわざわざ書き入れずにはおれなかったのである。

『九命』もまた思想的には今述べたような系列に連なる作品の一つと考えられる。

四

『梁天来』と『九命』では前章で見て来たように、その執筆意図がまったく異なっている。そこで本章では『梁天来』と『九命』の異同の中から『九命』の特質を考察してみたい。

まず『梁天来』と『九命』の大きな相違は、その両者の作品の構成にある。

『梁天来』は、事件の発端から貴興の天来に対する恨みがエスカレートしていく状況を述べ、ついに石室焼討ち事件を引き起こし、天来が悲憤のあまり告訴して結審に至る過程を、第一回から順を追って描いている。つまり、中国の旧小説の伝統的な形式をそのまま踏襲しているわけである。

それに対し『九命』の方は、まず第一回冒頭において説明一切ぬきで全書のクライマックスとも言える石室焼討ち事件の現場を出している。しかもそれを普通の叙述体ではなく、テンポの早いキビキビした会話を三六言、千字弱にわたってつなぐことによって、異常な殺人現場の切迫した雰囲気を描出するのである。会話と会話の合い間にところどころ短文が挿入されてはいるものの、それはただ前の会話と後の会話をつなぐ役割を果たすだけであって、全体のテンポを乱すものとはなっていない。次に『梁天来』と『九命』の冒頭部を引用する。

昔年有個富家学者、急於功名、不肯自安其分、後来生出一段荆棘事故、觸怒天顔、看官未曉得、聽我始末言来、話説雍正年間、粤東番禺県譚村、梁姓朝大、凌姓宗客、二人素有戚眷、合夥経営、人称為莫逆之交、（『梁天来』第一回・一頁）

「唉／夥計／到了地頭了／你看大門緊閉、用甚麼法子攻打？」「呸／蠢材／這区区両扇木門、還攻打不開麼？来、来、来／拿我的鉄錘来／」「砰訇／砰訇／好響呀／」「好了、好了／頭門開了／―呀／這二門是個鉄門、怎麼處呢？」「轟／」好了、好了／這響砲是林大哥到了。「林大哥／這裏両扇鉄牢門、攻打不開呢／」「唔／俺老林横行江湖十多年、不信有攻不開的鉄門、待俺看来。―呸／這個算甚麼、快拿牛油柴草来、兄弟們一斉放火、鉄焼熱了、就軟了／」「放火呀／」劈劈拍拍、一陣火星乱迸。（『九命』第一回・一頁）

『九命』ではこういう調子で焼討ち現場が描かれるのであるが、この場面は、梁天来と凌貴興の紛争の経過が第二回から改めて叙述された後で、その紛争の頂点として第一六回にもう一度再現される。しかし第一六回では普通の平叙体が使われている。『九命』がこういう構成をとっているために胡適らはこれを〈倒置法〉（倒叙法とも言う）と称し、外国小説の影響を受けていると主張するのである。

その胡適らの見解に対し香坂氏は前記論文において、『九

命』のような〈倒置法〉は南音類の中にもあり、必ずしも外国探偵小説の影響とは言いきれないのではないか、という疑問を提出している。

しかし私は、一九〇六年に創刊された『月月小説』に、主編者の呉趼人自身が『盗偵探』『上海偵探案』という二つの探偵小説を発表していること、及び『月月小説』がとくに探偵小説の翻訳を多くのせ、「探偵小説の大本営」[14]と称されていること、さらにまた呉趼人が『九命』を執筆する頃にはもうすでに外国の文化や制度、出版物などに関心を持ち、それらを勉強しようとする読書人の少ないことを嘆いている点などからみて、呉趼人が外国小説の影響をまったく受けなかったとは考えられないと思う。

呉趼人は『二十年』において西洋（日本も含めて）に学ぶ必要を力説しているが、その中の二、三の見解を取り上げて注釈を加えてみたい。

まず「外国の長所は、どんなジャンルであろうとすべて専門の学校が設立されていることにある」[15]と言っている。ところが中国では専門学校どころか初等教育の制度さえ整っていない。一九〇七年、呉趼人が「同郷人の子弟に教育がないことを憐み、広志両等小学校を開設」[16]するのは、外国とのあまりにも大きな懸隔に心を痛めたからではなかろうか。

また「経世文篇、富国策およびすべての地図などの類に至っては、読書人はそれらを買わないだけでなく、書名すらも知らない」[17]と慨嘆し、「今、みんなは時務について語り合っているが、私の考えでは書店を開くのがよいと思う。専門に人を招聘して一方では時務に関する書物を著わし、一方では西洋の書物を翻訳するのだ」[18]と提唱する。

呉趼人のこういう発言をみれば、彼が外国文化にいかに強い関心を寄せていたか了解できるであろう。しかもそれをたんなる知的興味の対象としてではなく、あくまでも中国のおかれている現実に対する積極な対応策として学び取ろうとする姿勢を崩さない。

しかし『九命』の構成について言うなら、呉趼人が広東省出身の作家である以上、広東で流行した南音類などにも親しむ機会は多かったであろうから、やはり南音類と外国小説の双方から学ぶものがあって、『九命』では〈倒置法〉を採用したと考えたい。

構成に関するもう一つの大きな相違は、『梁天来』に登場する本筋に関係のない事件を『九命』ではすべて削除したことである。即ち、『梁天来』の第三一回、黄経が讒訴によって武器を貯蔵して叛乱を企てているとみなされ獄につながれる。そこへ甥の程書が尋ねて来て黄経が寃罪であることを知り、上京して直訴し、天来の件とともに改めて裁判をやり直してもらってやっと黄経は釈放される。この物語は、天来の件と同じく寃罪であること、及び天来と一緒に再審理してもらって同時に釈放されたことの二点を除いては、貴興の殺人事件との共通点は皆無である。そのために天来の上京・直訴へと盛り上がっていく興味をかえって中断する結果になっている。この黄経の物語は、作者が『梁天来』を書き進めていく途中でふと思いついて、恣意的に挿入したという印象が強い。であるから『九命』

では黄経の件はまったく省いて天来の上京へとストーリーを収斂させていくのである。

またこの他にも呉趼人は構成について細かい注意をはらっている。

第一に訴状の取り扱いであるが、『梁天来』では最初に天来が県知事に告訴し、直ちに貴興がそれに反論して逆告訴する。それが天来側の敗北に終ったあと、天来は寃罪を晴らすまで次々に上級官庁へ控訴を行なうので、第一回目の訴状に続いて天来、貴興、天来、天来と計六回の訴状が全文出てくる。それに対し『九命』では天来と貴興が最初に県へ提出した訴状の全文を載せるだけで、二回目以降は訴状そのものについてはすべて省略されている。訴状はどれも似たような形式・内容のものなので、『九命』では繰り返しの退屈さを避けたのであろう。

さらに『梁天来』では上京途中の船上で天来が何天爵から天気の観測法を伝授される場面があり、その方法を箇条書きに列挙している。しかしそれは天来の上京というストーリーそのものの展開にとってはまったく不必要である。『九命』ではそうした無駄な場面を極力省いて、興味を最後まで持続させることに叙述の工夫がこらされている。

五

次に登場人物であるが、事件の発端から天来が何度も控訴を繰り返す所までの登場人物とその役割には大きな異同はない。ところが天来がついに上京を決意して故郷をあとにするあたりから相違があらわれてくる。とくに『梁天来』ではたいした役割を課せられてはいなかった蘇沛之が、『九命』では重要な働きをする。

『梁天来』では天来が貴興の手下や、貴興に賄賂をおくられた関所の役人に捜索され、しばしば危険に遭遇する。彼らの監視の目をくぐり、天来を無事に北京へ到着させるために占師の蘇沛之（実は新任の広東按察使）、商人の区明、区明の友人の何天爵、天来の友人の蔡徳先、区明や何天爵に協力する宿屋の主人、曽三公と曽四公などが登場する。

宿で天来の身上話を聞いた蘇沛之は、吏部衙門へ手紙を書いて天来に持たせる。ところが南雄の関所では貴興の腹心の召使い、喜来が劉千総とともに見張っているので、天来主従は区明の茶箱に潜み隠れて虎口を突破する。南雄にやっと到着した区明は、会試受験のため上京しようとしていた何天爵に天来主従との同行を依頼する。何氏が会試の燈篭をかかげ、証書をたずさえていたおかげで天来は贛州の関所を無事通り抜けることができた。このように天来は貴興の手下につけねらわれ、つねに生命の危険にさらされながらも、その度ごとに助けられて長い旅の末、やっと北京へたどり着くのである。

それに対し『九命』では区明や何天爵らが登場せず、その代わりに蘇沛之が天来の上京を果たすために大活躍する。沛之は広東へ赴く途中、宿で天来と隣り合わせて事情を聞き援助を申し出る。そして天来をかくまったうえ追跡して来た喜来に相を見てやり、官刑が近いので逃亡せよとそそのかす。そこで喜来は、貴興から役人への賄賂として託された三万両を持ったまま南昌へ逃亡する。行方不明になった喜来を探しに来た区爵興も

沛之と同宿してやはり相を見てもらい、「百日のうちに牢獄の災がある」とおどされて急遽、湖南へ難を避ける。こうして沛之の機智によって追手の凶刃を免れた天来は、ゆうゆうと北京へ到着するのである。

このように『梁天来』ではかなり複雑だった天来の上京経過を、『九命』では救援者を沛之一人にしぼることによってすっきりと処理したのである。と同時に、『梁天来』に描かれていた天来の関所突破にまつわる不思議な事件をカットしたのであるが、それについては後述する。

ところで『九命』において沛之にこのように活躍させることは、結末と重大な関連を有する。沛之は喜来と区爵興を追い払った後、爵興の紹介状を懐にして占師というふれこみで貴興を尋ね、直接貴興の口から今までの悪業の数々、各官吏へ贈ったそれぞれの賄賂の額まで聞き出す。そしてすばやく手を回して貴興一味の大立者、林大有を逮捕する。後日、雍正帝の勅令によって派遣された官吏、孔太鵬・李時枚も居並ぶ裁判の場で、貴興は必死に言いのがれようとするが、沛之、実は陳臬台（『梁天来』では最後まで蘇沛之のままであるが『九命』では本姓は陳氏になっている）が自分の正体を明らかにして確証をつきつけたので、貴興も観念して自分の罪状を認め処刑される。呉趼人は天来の上京途中で沛之を強く印象づけることによって、占師が実は按察使であったという結末の意外性をさらに強め、読者の意表を突こうと試みるのである。

また『梁天来』に比べ、『九命』の方でより力をこめて描かれているのは乞食の張鳳である。張鳳は貴興の襲撃を通報して天来の命を救ったうえ、天来側の証人に立つことを快諾するのであるが、その時の張鳳の決意を『九命』では次のように述べている。

「私が貴興の陰謀を梁家へ知らせたのは決して報酬を求めたためではありません。それなのに梁の旦那様は私を命の恩人だと言って乞食の仲間から拾い上げ、暖衣飽食させて下さり、かえって大きな御恩を受けてしまいました。私は証人を引き受けるだけではなく、火の中、水の中であろうとも喜んで参ります」（八二頁）

その張鳳の気慨にうたれて施智伯も天来のために訴状を書くことを承諾するのである。張鳳はその決意どおり、法廷でわざと拷問されても証人に立つことをやめなかった。拷問が役に立たないとみた貴興は、張鳳に金や女を贈って籠絡しようとするが、張鳳はそれをも毅然としてはねつけ、三たび出廷して、とうとう過酷な拷問によって故意に惨殺されてしまうのである。

さらに張鳳のように強烈に迫ってはこないが、いぶし銀のような光沢を湛えて登場しているのが天来の下僕、祈富である。祈富も度重なる貴興の襲撃や、天来に従って上京する際に、何度も生命の危険に遭遇しながらあくまでも主人の側を離れず、ついに天来とともに勝利の判決を迎えるのである。呉趼人は忠とか孝をひじょうに重んじるが、祈富も忠僕の名に恥じない人物である。

総じて『九命』では天来・貴興をはじめ、登場人物それぞれの性格はかなり巧みに描き込まれている。貴興一味では、貴興の金をめあてに盛んに世辞をつかって貴興の気に入られる叔父

の凌宗孔。梁家襲撃も、もともとはこの宗孔が引き起こしたのである。悪智恵にたけた軍師格の区爵興、無頼漢の総帥、林大有。天来の側では、度重なる敗訴に疲れ果て、血を吐いて死ぬ施智伯が印象的である。呉趼人はワキ役に至るまでていねいに描き込んでいる。

六

『梁天来』と『九命』の文体は、一言でいうと『梁天来』の方が文語的要素が強く、『九命』の方が口語的要素が強い。と同時に『九命』には見過ごしてはならない特徴がある。それは作品に普遍性を持たせるためにできるだけ北京官話を使ったことである。呉趼人は南方で流行した弾詞曲本の類について、

一つとして忠孝節義を述べていないものはなく、さげすむ所はないが、惜しむらくは方言に限定されて遠くへ広まらなかった。(18)

と述べて残念がっているが、この梁天来の事件も種々に作品化されていながら、方言で書かれているために広東以外にはほとんど知られなかったことを惜しんで、広い地域の人人が読めるように北京官話で書き直したのだと思われる。そのために呉趼人は文体に留意するだけでなく、広東省以外の人々には理解しにくいと思われる風俗習慣についても註を加えている。一例をあげよう。

突然、門外で『新科解元試録！』と高らかに叫ぶのが聞こえた。（これは広東の風習であって、科挙の及第者が発表される前夜、印刷業者は及第者の氏名を調べ上げ、夜を徹して活字を拾い、全合格者の姓名が書き込まれた掲示板が出来上がるとすぐ印刷して街じゅうを売り歩く。これを試録と言い、その時、掲示物はまだ張り出されていないのである）(19)

これは広東独特の『試録』についてわざわざ説明しているのであり、これも普遍性に対する努力の一つのあらわれと見ることができる。こういう註釈は『二十年』や『雲南野乗』など呉趼人の他の作品にはよくみられるが、清末においても呉趼人以外の作家の作品にはあまりみかけないようである。呉趼人がいかに自作の普遍性という点に努力したかの一つの証左になり得ると思う。

『九命』と『梁天来』のもう一つの重大な相違は全体の字数である。『梁天来』が四〇回、約五万七千字なのに対して、『九命』は三六回と章回数では少なくなっているにもかかわらず、約一一万五千字とおよそ二倍に引きのばされているのである。それだけに『梁天来』が説明や修飾語をぬきにして、事件そのものの骨子だけを追っていくのに対し、『九命』ではきめ細かな情景・心理描写が多く、それが『九命』の魅力をいっそう高めている。例えば貴興が借用証書を偽造し、無頼漢を多数引き連れて天来から金を強奪するが、数日後またも天来と出会う。両書におけるその時の貴興の心理描写はそれぞれ次のようになっている。

一日、天来閒歩市中。貴興偶然遇之、時思天来往日被欧、今番見他愈覚精神、如今止好在此当衆之地、再打他一番、令其畏我之威、不敢抗拒。（『梁天来』第四回・六頁）

原来貴興自従糾衆搶銀之後、甚是洋洋得意、覚得這個玩意兒、很有趣味。雖然不是為銭財起見、然而想起那一天的情

景、猶如出兵打仗一般、自己是元帥、左有軍師、右有護衛、号令一声、四面伏兵斉起、那張石凳、猶如将台一般、站在上面、好不得意／終日坐在家里、実在悶得無聊、怎能够時常有這個玩意兒、玩玩就好。他終日存了這個心思、這天又在路上遇見天来、暗想天来屡次被我凌辱、当在晦気頭上、怎麼倒覚得他的眸上精神煥発呢／（『九命』第七回・二九頁）

この二つの文章を比べると、『九命』の方が『梁天来』より貴興の心理状態がはるかに具体的でわかり易い。『九命』では貴興の得意な心情は、自分を元帥、左には軍師（策謀家の区爵興であろう）、右には護衛（凌宗孔であろう）、そして無頼漢らを伏兵と、各々の任務配置を想定することによってより強まるのである。こういう描写方法の差は随所にみうけられる。

また『梁天来』には多くの詩が挿入されているが、『九命』では詩がほとんど省かれている。例えば今あげた貴興と天来の出会いの場面で、貴興が貧しい叔父の易行に、天来を一回なぐる毎に米一担やるという約束で天来をなぐらせて、それを見物して興に入る。それを知った易行の妻、鄭氏は夫を引っ立てて大恩ある梁家へ謝罪にゆく。こうして易行は妻から貴興と手を切らせられることによって処刑を免れるのであるが、『梁天来』ではそうした鄭氏の賢妻ぶりを称揚する詩、

易行家計本貧難、頼有賢妻透肝胆、
誰道閨房言莫聴、能於危處保身安。[21]

を付け加える。そこを『九命』では詩を省いて次のような説明にとどめている。

到後来、梁凌両姓、鬧了個九命訟案、等到奇寃伸雪時、一班強徒、没有一個倖免的、只有易行未曽混入強徒隊里、一糸也不曽帯着、這就是鄭氏賢慧所致。[22]

ことに顕著な例としては、『梁天来』では第五回、貴興の妹の桂仙が梁家を訪問し、その夜は梁家へ泊って天来の娘、桂嬋とともに詩を賦す。その詩一二首をすべて列挙し、この回はほとんど二人の作った詩だけで成立している。ところが『九命』ではこの場面は、兄の貴興たちが梁家の新米を略奪しようと話し合っているのを立ち聞きした桂仙が、秘かに梁家をたずねて警戒を促し、そそくさと立ち去ることになっている。

このように『九命』では、今や仇どうしになってしまった梁家を凌家の娘が訪れて詩を賦すような悠長さはまったく見られない。予想される大事件の無気味な前触れは、桂仙のおどおどした様子、及び「兄さんを諫めることができなければもう今後再び兄さんにお目にかかることはありません」[23]という桂仙の決意にも示されている。つまり『九命』ではここで桂仙と何氏（貴興の妻）の自殺と、貴興がこの二人の報復のために梁家を襲撃する伏線をしくのであり、こういう所にも呉趼人の配慮は行き届いているのである。

七

呉趼人が『九命』を執筆する際、〈風水〉や〈算命〉などの迷信を打破する意図を持っていたことは前述したが、そのため『梁天来』に登場する不思議な事件は『九命』ではほとんどカットされている。例えば『梁天来』では、天来が張鳳に夢で喜来の待ち伏せを教えられる。天来はそのため区明の茶箱に隠れ

て関所を突破しようとする。喜来がその茶箱に手をかけたとたん、空がかき曇って暴風雨となり、喜来は乞食になぐられて気を失い、劉千總もまた七人の女性の幽鬼に戦き恐れる。区明はこの隙に関所を越えるのだが、この乞食はもちろん張鳳であり、幽鬼は殺された天来の家族である。彼らはこうして天来の上京を助けるのである。

また『梁天来』では貴興はある夜、両乳を割かれ、心臓を刺されて殺される夢を見る。後日貴興は蘇沛之らの裁きによって、夢と同じ方法で処刑されるのである。

このようなエピソードは『九命』にはない。『九命』では天来が喜来の追跡を知るのは祈富が喜来の姿を見かけて知らせるという自然なストーリーに変わっている。『九命』で先述のように天来が蘇沛之の機転によって救われる、という風に大幅に筋書を改正したのは、不可思議な挿話の削除と同時に、〈算命〉によって家族を殺された天来が、今度はその〈算命〉によって救われる、というパラドックスの妙をねらったのだと思われる。但し迷信打破を標榜する呉趼人は、ストーリーの展開上やむを得ず迷信に筆が及ぶ場合には、

諸君、この算命、風水、白虎、貔貅などはみな荒唐無稽であり、どうして叙述の必要があろうか。ただ当時の民智の程度はこんなもので、人々はこれらは人智では測れないと考えていた。だから民衆が迷信に従うのなら私もそのまま述べないわけにはいかない。[24]

と書き加えるのを忘れない。

ところで『梁天来』の作者は〈因果応報〉を信じていたらしい。喜来が貴興の金を横領しようとたくらんで、仲間を殺そうと刀を振り上げたとたんその刀に落雷があり、喜来は川に落ちて死ぬ。その報告書を受けた時、宗孔は貴興に「あいつは心根が悪いから雷神に殺されたのです。これは天があなたを助けてくれたのですからどうして恨むことがありましょう」[25]と言うので貴興も怒りをおさめて喜ぶ。この場面は『九命』にはなく、『九命』では喜来も貴興たちと一緒に判決を受ける筋書になっている。

しかしながら『九命』におけるこのような改変は、〝小説〟としてみた時、どうだろうか。『梁天来』における張鳳のお告げ、関所越えの際の幽鬼は物語としてはおもしろいし、当時の人々にとってはなおのこと抵抗なく受けとめられたであろう。

さらに『梁天来』では天来の上京までに何度もヤマが設定されている。天来と何天爵の出帆後まもなく「それは梁なにがしの船ではないかあ」と叫ぶ人があり、天来らは追手かと思い肝をつぶす。しかしそれは南雄の人が燈篭を届けに来てくれたのだった。が、すぐまた巡視艇に行く手を阻まれる。それは天爵がお金を包んで通してもらう。北新関では役人に尋問されるがそれも何とか切り抜ける。このように天来の上京途上で何度もハッと息をのむ場面があり、ストーリーとしては変化にとんで興味深い。

『九命』が区明や天爵を登場させず、従って不可思議な事件や、読者をハラハラさせる危険な場面を削除してしまったのは、呉趼人の〈迷信打破〉という思想体系からすればやむを得ないことではあったが、それによって小説としてのおもしろさ

まで同時に切り捨ててしまう結果になっている。こうして自分の主張をあくまでも貫く所に一般に「いわゆる〝譴責〟小説は思想的意図が先に立って小説としてはつまらない」と評される所以があるのである。『九命』は〝譴責〟小説と称される作品の中ではぬきん出て「おもしろい」が、『梁天来』と比べる時、今述べたような点においてはやはり再考の余地があることは否定できない。それは作者の小説作家としての技量と、切迫した時代状況の双方に問題があったのだと思われる。

ところで呉趼人は外国の司法制度についても「我々西側の例によれば、誰かが君を冤罪に陥し入れたら告訴できるし、さらに君が潔白な良民であるにもかかわらず、誰かがかの無頼漢に適用する法律を君に執行して名誉を傷つけでもしようものなら、その人に賠償させることもできます」[22]と西洋人に語らせている。そうした外国の民主的司法制度を知るにつけ、梁天来の事件のような金の力で足かけ六年にもわたって闇から闇へと葬られた暗黒裁判に対する呉趼人の憤りは強まっていったのではなかろうか。そしてそれが『九命』を自分なりの創作意図の下に自由に書き改める一つの動機になったのではなかろうか。

呉趼人が妻子を抱え、有閑階級の人間でもなかった以上、何らかの手段によって生活の資を入手しなければならなかったことは自明の理であり、そのために三十数種もの小説が書かれたと推察できる。しかし、江南制造局書記の職を捨て、《采風報》や《楚報》の主筆の地位を投げ打った彼が、一九〇六年に再び戻って来たのが『月月小説』という小説の世界であったことは、やはり呉趼人の中に一貫して書きたい欲求、訴えたい欲求が存在し続けていたことを想像させる。とくに彼が『二十年』・『痛史』・『九命』などの大作を相ついで『新小説』に発表していた時期が、反華工禁約運動を推進するためせっかく得た《楚報》主筆というポストさえ放棄して、各地でアメリカ商品ボイコットを呼びかける演説をして回っていた時期と重なることを考える時、その書きたい主題が彼なりの救国と革新の道であったことは疑いをいれないように思われる。

呉趼人は酔生夢死の全中国人民にペンで以って覚醒を呼びかけた。その時彼が救国の原動力と考えたのは英明なる皇帝つまり光緒帝と、開明官僚とであった。呉趼人は「仏の前では一切衆生、皆これ平等、皇帝もまた全人民をみんな平等に見守っておられる」[23]と言い、「光緒帝が聖旨を下して天下の暴官汚吏を殺し尽くす」[24]と光緒帝に救いを見出し、改革の希望を託している。また梁啓超も一九〇二年に執筆した「論仏教与群治之関係」において「一切衆生、皆仏性あり」[25]云々と呉趼人と同様のことを言っている。帝国主義列強と清朝封建専制政府の二重の抑圧に呻吟する中国人民が、「仏の前では貴賤貧富の別なくみな平等だ」と考えることによって救いを見出す点に、仏教が清末において果たした進歩的側面があったのであろうが、呉趼人が仏説を引用して皇帝について上述のように語り、光緒帝に期待をかけているのは、清末の諸小説の中ではきわめてユニークな発想であるように思われる。呉趼人はさらに、

今、天下の大勢はもし読書人の生き方を改革しないなら一〇年後のことを敢えて言えない所にまで来ている。……官吏になるのはもともと読書人なのだから、まず読書人の不

明を憂えねばならない。[39]

と士大夫の意識の改革を提唱している。そういう思想状況にあった呉趼人にとって、読書人の風上にもおけない貴興や、私利私欲の追求に明け暮れて経世の本分を忘れた汚職官吏などは、どうしても批判し、攻撃せざるを得ない対象として映ったことだろう。彼らに対する呉趼人の批判の目は鋭く厳しい。

しかもこの物語は、貴興が占師におだてられ、にせ翰林、陳大人に科挙の試験の際合格させてやると一万両を騙し取られたあげく落第する。その落第の原因を〈風水〉に求めた所に貴興の悲劇があり、貴興もまた〈算命〉や〈風水〉を信じている遅れた社会状況と、かつて世界でも類のない厳正さを誇っていた筈の科挙の試験にさえ賄賂が横行するような、腐敗しきった官僚界とにもてあそばれた犠牲者とみなせよう。そしてまたその貴興に善人で生真面目な天来がさんざん痛めつけられるのであるが、その天来の苦難は貴興を陥し入れたと同じ官界の下層から上層にまで及ぶ腐敗堕落によってさらに倍化されるという二重構造を擁して、中国社会の断面をみごとに浮彫にするのである。

本論で取り上げた『九命』は呉趼人のオリジナルな作品ではないが、上述のように原作とは大きく異なる創作意図のもとに、彼が熱誠ふるって書き上げた秀作であり、清末の良心的インテリゲンチャの思想を代弁していると言える。そして芸術的にも緻密な構成といい、生動的で緊張した文体といい、ゆうに清末小説を代表するに足る作品と位置づけることができると思う。

註

(1) 復旦大学中文系一九五六級中国近代文学史編写小組編著『中国近代文学史稿』(采華書林影印)

(2) 劉大傑著『中国文学発展史』下(古典文学出版社刊一九五八年)三六三頁

(3) 呉小如著『中国小説講話及其它』(古典文学出版社刊一九五六年)

(4) 胡適著『胡適文存』第二集巻一(遠東図書公司刊一九二二年)二三八頁

(5) 呉趼人著『九命奇冤』(香港広智書局刊発行年月日不明)第三六回一六八頁。『九命』についてはこの版を参照す。

(6) 孫楷第著『中国通俗小説書目』(作家出版社刊一九五七年)一九五頁

(7) 阿英著『晩清小説史』(作家出版社刊一九五五年)一五四頁。但し初版は一九三七年に上海商務印書館より発刊され、五五年本は初版に手を入れて再刊された。なお再版出版後、次の論文が発表されている。

① 「関於〝二十年目睹之怪現状〟―〝晩清小説史〟改稿的一節―」人民文学出版社編輯部編『明清小説研究論文集』所収 一九五九年原載は『文芸学習』一九五七年一月号

② 「関於〈老残遊記〉―〈晩清小説史〉改稿的一節―」『文学評論』一九六二年四月号

(8) 註(2)に同じ

(9) 清代四大奇冤『梁天来』(大文出版社出版広文公司発行 著書名と発行日は不明)但し第四〇回の最後に「其後乾隆年間、貴興託生恵州府、髯目為奴、宗孔啞口正食、梁天来身居貴介公子、欲知三人後世端詳、請看警富後伝、」とあり、これは〈出版説明〉と矛盾するが、おそらく『梁天来』の続作として書かれた『警富後伝』を宣伝するためにわざわざ末尾に後で書き足したものと思われる。

(10) 呉趼人著『二十年目睹之怪現状』(香港広智書局出版発行年月日不明)上冊九三頁。

(11) 註(5)に同じ 一五二頁

(12) 呉趼人著『恨海』に対する新聞の批評の中にある語。『月月小説』第三号「説小説」に見える。

(13) 註(7)に同じ 一五五頁

(14) 張静廬輯註『中国近代出版史料初編』（上雑出版社刊　一九五三年）
(15) 註（10）に同じ　八二頁
(16) 李懐霜著「我仏山人伝」（孔另境輯録『中国小説史料』古典文学出版社刊　一九五七年所収）
(17) 註（10）に同じ　八三頁
(18) 註（10）に同じ　四七八頁
(19) 阿英著『小説二談』（古典文学出版社刊　一九五八年）「呉趼人的小説論」八〇頁より引用
(20) 註（5）に同じ　一四頁
(21) 註（9）に同じ　七頁
(22) 註（5）に同じ　三七頁
(23) 同前　三九頁
(24) 註（5）に同じ　二三頁
(25) 註（9）に同じ　五五頁
(26) 註（10）に同じ　下冊　二八六頁
(27) 同前　四〇一頁
(28) 同前　二八一頁
(29) 梁啓超著『飲冰室合集』文集第四冊　飲冰室文集之十（上海中華書局刊　一九三二年）四九頁
(30) 註（10）に同じ　上冊八一頁